



校長室だより

No.5

つなぐ

平成30年9月1日
校長 阿部修三

求める児童像

- 進んで学ぶ子
- 思いやりのある子
- がんばりぬく子

立派な大人になりなさい

80年以上前に書かれた小説が今、大きな話題となっています。原作者は吉野源三郎。タイトルは「君たちはどう生きるか」。漫画版は200万部を超えるベストセラーとなり、宮崎駿の新作ジブリ映画のタイトルにもなるそうです。いじめ、貧困、人間の悩み、過ち、偉大さ等をテーマにした名作です。そのうちの一つを紹介します。



主人公の中学2年生・本田潤一君は、「コペル」というあだ名で呼ばれています。お父さんはコペル君が小さい時に亡くなりました。病床のお父さんは、亡くなる3日目におじさんと呼んで「私はあれ（潤一）に立派な男になってもらいたい。人間として立派なものにね。」と遺言を残しました。

中学校に通うコペル君は、ある日親友の北見君が上級生に狙われているということを知ります。コペル君は「もし上級生から因縁をつけられるようなことがあれば、仲間みんなで対抗する。」と北見君と約束します。

ある雪の日。仲間と雪合戦していた北見君は上級生の作った雪だるまを壊したと因縁を付けられ、殴られてしまいます。その場にいた他の仲間は、北見君をかばい上級生の前に出て抵抗します。でも、コペル君は仲間が殴られているのを黙って見ているだけでした。親友をかばう勇気がなかったのです。

この事件の後コペル君は「約束を守れなかった自分は卑怯者だ。」と自分を責めます。そして、二週間も寝込んでしまいます。休んでいる時、何度も雪の日の出来事を思い返します。初めは、仲間への言い訳ばかり、いくつも思いつきました。あの場になかったことにするのはどうか、この風邪のせいにしようか・・・と。でも、勇気を出せなかった自分を責め、苦しむ…。そんな悶々とした日々を過ごしていました。

ある日、その苦しみを日頃から信頼を寄せているおじさんに話します。「僕、いったいどうすればいいんだろう。」 その時おじさんが、コペル君に語り掛けた一言一言が、私たちの心に強く訴えかけてきます。

- 「変えられないことをああすればよかった、こうすればよかったと考えるのは止めて、今、自分がしなければならないことに真っ直ぐ向かっていきなさい。同じ間違いを2度繰り返しちゃいけないよ。」
- 「今、君は大きな苦しみを感している。なぜ、それほど苦しまなければならないのか。それはね、君が正しい道に進もうとしているからだよ。」
- 「自分の過ちを認めることはつらい。しかし、過ちをつらく感じるということの中に、人間の立派さもあるんだ。僕たちは、自分で決定する力を持っている。だから、誤りを犯すこともある。しかし僕たちは、自分を決定する力を持っている。だから、誤りから立ち直ることもできるんだ。」

物語の最後に作者は、私たちに「君たちは どう生きるか」と問いかけてお話は終わります。

子どもたちは、成長の過程でいつか必ず壁にぶつかります。そしてその壁は、人の力を借りつつも、最後は自力で乗り越えなければなりません。そのためには、人を信じる人になり、人から信頼される人にならなければならない。苦しい状況から決して逃げてはならない。どんな局面でも正面から向き合う真摯な姿勢と強い心を持たねばならない。そして何より、どう打開するべきかを「考える力」を育てておかねばならないのです。

毎日、学校や家庭で行われる子どもへの指示や指導、叱咤激励…。それは、わが子や教え子たちへの溢れるほどの愛のメッセージ「立派な大人になりなさい」ではないでしょうか。

子どもが「どう生きるか」は、大人が子どもを「どう育てるか」にかかっている気がしてなりません。